

病型が、十九世紀は妄想型が、二〇世紀は解体型（かつての破瓜型）が主流であった。統合失調症は徐々に軽症化してきており、緊張病性興奮や荒廃型はほとんど見なくなった。これは統合失調症患者に対する、社会的ストレスが軽減してきているためと考えられている。社会的因子で軽症化してきているということは、統合失調症の病態や治療を考える上で大変重要になってくる。例えば、薬物療法だけでなく、心理社会的治療の有用性も理解できるようになる。それに対して、双極性障害は時代の変遷をしていない障害である。双極性障害は、すでに紀元前五世紀にギリシャのヒポクラテスによって正確に記載されており、其の症状は現代のそれとほとんど変わりが無い。興味深いことは、同時に痛風との関連性が指摘されている。現代、抗痛風薬の中から炭酸リチウムが双極性障害の第一治療薬になってきたのは、単なる歴史上の偶然ではないと思われる。双極性障害の病因を考える上で、障害史は大変重要である。障害史を見ていないと、見当違いな病因を掘り下げて行ってしまうことになる。パニック障害は、DSM-IIIが作られる中で、乳酸の投与で人工的に不安発作が誘発されることと、抗うつ薬のイミプラミンによって不安発作が抑制されるという生物学的エビデンスから、心理的要因で起こるとされた不安神経症を否定し、取って代わる障害概念として登場してきた。それでも、パニック障害の前身であるフロイトの不安神経症や、森田正馬の発作性神経質の歴史的障害概念の変遷史を知る事は、障害構造を理解する上でも、

治療上においても重要である。

(平成十六年九月例会)

## 消息

### 「二十一世紀の本居宣長」展

平成十六年九月十八日から十一月七日まで、川崎市市民ミュージアムで「二十一世紀の本居宣長―学問・交流・情報」と題して、本居宣長の業績を関連資料と共に展示した。

なぜ「二十一世紀の……」と銘打ったか、疑問に思ったが、主催者は、宣長が伊勢松坂（今の三重県松阪市）をほとんど出ること無く、門人や書籍などから情報を得て、広い世界で活躍しているのと同じことをしている。これは現代の情報ネットワークの利用の仕方と同じという。また、地理・考古・言語・医学・文学・和歌・謡曲演奏とその分野の広さは現代のマルチ人間の先駆けとなっている。現代と相通じるものがあり、我々二十一世紀の人間が宣長に学ぶべきものが多い。

この展覧会では五つのセクションで構成されている。第一セクションの「宣長思想の系譜―好信楽―」では、宣長が「百科全書的思考」の持ち主であることを伝え、その萌芽が十代の頃、現れていることを示している。入口の正面には、宣長が十七歳の時に描いた日本地図「大日本大絵図行程記」が目につく。陸路と海路が失書され、宿駅が細かく記されてい

る。

宣長の関心は若い時から広がっていて、二十七歳の時に「宇宙の有る所、適(ゆ)くとして好み信じ樂しまざるは無し、天地万物、皆吾が賞樂の具なるのみ」と友人に書き送っているという。この事を実証するかのように、天文・謡曲・和琴・神話・地理・歴史・漢学・文学・言語学・和歌・医学と巾広い分野に関心を示す史料が展示されている。

第二のセクションでは「自画像史のなかの本居宣長―近世日本自我意識の生成―」と題して、江戸時代の文人や僧侶たちの自画像と比較しながら、宣長の自画像に宣長の自我形成をみようとしている。

宣長の自画像は四点残されていて、いずれも画家でない宣長が自ら筆を執って描いたものという。現存するのは四十四歳と六十一歳の自画自賛像で、四十四歳の方は三種類ある。宣長が手元に置いてあったもの、宣長の子春庭が宣長の門人に譲ったもの、そして画稿の三点である。宣長の自画像には、書物や短冊などをいっぱい広げた机と満開の桜の枝の前に坐っている姿がある。総髪で「鈴屋衣」を着て、袖にくるんだ両手を合わせた独特のポーズである。

「書物と桜は宣長が最も心を傾けた精神的存在」であり、アイデンティティの主張は自画像だけでなく、自分の誕生の日から始まる宣長の日記や「家のむかし物語」「本居氏系図」墓の図まで書いた「遺言書」などにも見られるという。

第三のセクションでは「日本」のかたちをもとめて」とし

て、「古事記」「万葉集」の研究、金印や出雲大社などの古代史研究、これらの研究を通して日本の起源を探究した業績が関連史料と共に展示されている。また宣長は「地球一覽図」を持っていて「世界の中の日本という視点も確立」していたという。

第四のセクション「宣長伝説の諸相」では、宣長の門人が宣長を孔子と重ねる事によって、宣長の名声は没後も門人や自称門人を生むという宣長伝説を追求している。幕末には勤王思想と結びつき、討幕の思想形成の一助となったが、明治になり国家体制が変わると宣長は忘れられる。宣長が復権するのは「落合直文等の、新しい国文学の運動」によるという。

第五のセクションは「メディアネットワークの中の宣長―メールと〇〇会―」と題して、宣長の生き方を現代のメディア社会に当てはめて見て行こうとするコーナーである。生涯執筆活動と出版を繰り返して、松坂を来訪する門人や仲間との交流は、出版をコンピュータネットワーク、手紙をツール、メール、講釈をオフミーツィングという言葉に置き換えることができるという。

このような視点から、伊勢参宮の錦絵、交流のあった文化人たちの肖像画、宣長の書簡や交流のあった人々からの書簡、宣長生前中の出版物などが展示されている。

なお、平成十六年十一月十六日(火)から平成十七年一月十日(月祝)まで、四日市市立博物館で同展が開催される。

(蔵方 宏昌)